

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2004	3898	甲 乙 1971

博士(人間科学)学位論文 概要書

現代青年の生き方に関する人間科学的研究
—実存的視座に基づいて—

A Human-Scientific Study on the Attitudes toward Life of
Modern Japanese Youth
—From the View-point of Existential Perspective—

2005年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

加藤 陽子

Kato, Akiko

研究指導教員： 嵯峨座 晴夫 教授

近年、いじめや学級崩壊、不登校などの教育的問題に加え、社会的引きこもりや非就労者、薬物依存、家庭内暴力などが社会問題となっており、現代青年のあり方が憂慮され続けている。こうした現状を受けて、青年に関する様々な研究が行われてきた。しかし、現在の青年期研究の多くは、社会的な側面または発達の側面のどちらかに言及する手法が多数を占めており、各々の領域における研究は詳細で専門的なものとなる一方で、青少年の生き方やあり様について包括的に論じた研究が少ない。またさらに、一般に現代青年を捉えようとするとき、その多くの見解や言説は、自己愛の肥大化、自己拡散的で場当たりのな生き方や生き方自体に対する無関心化など、彼らの生き方に対する消極的な態度をクローズアップする傾向にある。

しかし、人間は、数え切れない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら、相互に極めて複雑に影響し合い、自らの中でそれらを統合し、同一性を見出す存在である。そのため、こうした多様な側面を持つ人間存在を、多種多様な状況・分野ごとに要素に分断するという従来の研究方法では、現代社会における青年の存在は語りえないだろう。したがって、以上のような問題を解決し、さらには現代日本社会における青年たちの存在、あるいはその様相を今一度明確にするためには、人間の存在全体を把握する人間科学という研究による彼らの捉え直しが必要だといえる。そしてその中でも、多様な現代社会の下で、主体的に自らの人生を選択し、創造して生きていくという、人間の積極的な精神的・健康的側面を支持する実存的視座を持つことこそ、消極的なイメージで捉えられがちな現代青年を、従来の研究とは異なる視点から語る上での1つの有効な手立てとなると考えられる。

そこで本論文においては、現代青年の実態を明らかにし、実存的な視座から現状と問題点の検討を行うことで、包括的に現代社会における青年の様相について考察することとした。そのため、まずは、現在一般に形作られてしまった消極的な青年像を指摘する見解や言説の裏側にある社会的な背景について整理を行い、その上で、大学生、不登校児童・生徒、同居未婚子などを取り上げて、その現状と問題点を検討した。

その結果、近年見られるような現在志向で私的価値を重視しつつも、他者との親密な関係性を求めているといったアンビバレントな現代青年の心性に大きな影響を与えた要因には、2つの困難な状況が見られた。それは、ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失。さらには、自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代消費社会による差異化の要請の軋轢、という状況であった。

また現代青年は、細分化された研究分野から、心的負担のコントロールという消極的な適応方法を身につけていると指摘されている。しかし、彼らは高学歴化する社会の中で大学生活を送ることや一時的に不登校という形をとること、あるいは親と同居することによって、モラトリアムに安住する傾向にあるものの、実存的な視座から捉えた場合、生き方やあり方に対する関心は失われていなかった。むしろ、そこには生き方やあり方

への積極的意味づけである実存的な態度が見受けられた。

たとえばそれは、大学生の調査において、「やさしさ」による回避というロジックを用いた者たちが、自分の生き方やあり方に対する承認を、自らの内側に求めることで補強し、積極的意味づけを行うという語りから明らかにされた。またさらに、不登校にならなかった者の調査においても、その内面には、不登校気分を乗り越える際に積極的に生き方に対する意味づけを行う過程が見受けられた。つまり、従来の研究で指摘されてきた、その場その場で自己拡散的な適応方法を取るという現代青年の消極的な適応状態とは異なる側面が、彼らの中に存在することが明らかになったといえる。

したがって、場当たりの消極的に見える現代青年という指摘は、現代青年の全体の様相を捉えきれておらず、依然として現代青年の内面には、自らの生き方を模索しようとする“生き方に関する実存的態度”が存在していること、そして、それをもとに内面において自らの生き方に積極的意味づけを行っていることが明らかとなった。

以上、本論文においては、消極的な枠組みの中での現代青年へのアプローチという従来の視点を脱し、実存的な視座から現代青年の様相を多角的・包括的に考察した結果、彼らの生き方を積極的な側面から捉え直すことが可能となった。こうしたことから、現代青年の様相を捉える上での1つの新しい機軸を見出せたと考えている。むしろ今後の課題は、こうした機軸をもとに、今回取り上げられなかった、よりいっそう広範の青年の様相を視野に入れた研究を行いたいと考えている。